

変わる日本の「暮らし」と「まち」

弥生人の集落跡に
市民が集う防災公園が誕生

安満遺跡公園
防災公園街区整備事業
(2012年・平成24年)

阿部民子

text by Taniko Abe



illustration: Shigeyuki Sakata

3月23日、大阪府高槻市の中心地に市民待望の公園がオープンした。その名は「安満遺跡公園」。ネーミングからもわかるように、じつはこの下には、弥生時代の遺跡が眠っている。その貴重な歴史的遺産を活かしながら、緑豊かな防災公園に生まれ変わったのだ。

新たな公園の広さは、なんと甲子園球場約5個分(約22ヘクタール)。今回先行してオープンしたのは、そのうちの約4ヘクタールだ。園内に入るとまず目に飛び込んでくるガラス張りのおしゃれな

建物は、市民の活動や交流拠点となるパークセンターだ。公園事務室のほか、多目的室や工作・調理室、シャワーや更衣室があるランニングステーションなどがある。外には雨や日差しをしのげる屋根付きの広々とした人工芝が広がり、とても気持ちのよいスペースだ。

子ども連れの人気を呼びそうなのが、全天候型の子どもの遊び施設「ボーンランド プレイヴィール」だ。屋外で木製遊具や自然素材で遊べるほか、屋内ではお絵かきや数々のワークショップも楽し

める。さらに、食事やお茶が楽しめるおしゃれなピッツェリア&カフェもあり、オープンと同時に、連日多くの人でにぎわっている。

安満遺跡の集落が開かれたのは、今から約2500年前。北九州から稲作技術を携えた開拓者



憩いの公園は、まさに高槻市のセントラルパーク

しづりをたどることができる、国宝級の大規模遺跡だ。

遺跡を守りながら公園を整備

それにしても、JR高槻駅、阪急高槻市駅からそれぞれ徒歩10分程度という便利な場所、かつてこれほど広大な土地が、なぜ宅地開発をまぬがれていたのか…それは、90年にわたり、この地の大部分が京都大学の附属農場であったことによる。学外の人が入りにくい大学の敷地、しかも農地であったことが、地下の遺跡が良好な形で保存されるという奇跡を生んだのだ。

そこで、移転と跡地活用について、三者の意向が一致。京都大学は最先端の設備を整えられる木津川市へ移転。跡地の内、8ヘクタールは、高槻市の要請を受けて、防災公園整備のノウハウや経験が豊富なURが整備するという、それぞれが望ましい形へと手を携えて歩むこととなった。

UR西日本公園事務所の服部泰之は整備の経緯を話す。

「90年の歴史がある農場を丸ごと引越すのは、並大抵のことではありません。しかも研究は継続性が大事なので、途中で途切れてはいけません。受入側の関西学研本部と綿密に連携をとり、農場移転先での整地やインフラ整備の進捗状況を見つつ、農場の施設を順次移すお手伝いをしていきました。その一方で、跡地での公園づくりでも高槻市の期待に応えたい、と多方面に心を配りながら整備を進めました」

遺跡ならではの難しさも立ち上がった。どこにどんな遺跡が眠っているのか、掘ってみなければわからない。もし重要な遺跡が発見されれば、そこで工事は中断

史跡指定、保存の観点から防災公園の開発に制約がかかる。事実、雨水貯留施設の工事中に、弥生人の足跡が残る水田跡を発見。急遽、雨水貯留施設の場所を変更する苦労もあったという。遺跡を守りながら細心の注意を払って工事を進め、事業開始から約9年を経て、今回の一次オープンの日を迎えたのだ。

市民とともに成長する公園

「安満遺跡公園は遺跡を活かすとともに、最初からあえてつくり込まない、ハイメードの公園をコンセプトにしています。構想の段階から市民の皆さんにこの公園で何がしたいかを募り、それを叶えながら『市民とともに育て続ける』公園になればと考えています」と語るのは、高槻市安満遺跡公園整備室の藤井敏温副主幹だ。

市民メンバーで組織された「安満人倶楽部」も発足し、遺跡の発掘体験や遺跡から発掘された古代米を育てる活動なども開始。市民や企業の寄付で樹木やベンチを設置したり、広場やトイレに地元企業の名前を付けるネーミングライ

ズの試みで公園の収益をあげ、市民活動やメンテナンスに還元する仕組みもユニークだ。もちろん広域避難地としての側面も万全。耐震性貯水槽や防災倉庫、ソーラー照明なども完備。2万8000人相当の避難者が3日間過ごせる機能・設備を備えており、今後、ヘリポートも整備する。普段は、イベントや体験アトラクションなどに活用できるオープンスペースは、万一のときのボランティア拠点や応急仮設住宅候補地などへと、臨機応変に活用できるという。

2021年の全面オープン時には、弥生時代当時の景色が再現されるほか、昭和5年建設の大阪府近代化遺産でもある京都大学の農場本館がレストランとしてリニューアル。安満遺跡を楽しむVRや、出土品を展示するスペースも計画。2500年前の「暮らし」と「まち」に思いを馳せ、楽しい時間を過ごせる新名所となることだろう。

いっぽう、京都大学では、遺跡があるため新たな研究施設の整備が難しく、設備なども老朽化したことなどから、10年ほど前から移転を検討してきた。その候補地として浮上したのが、URが京都、大阪、奈良の3府県にまたがって開発している関西文化学術研究都市(けいはんな学研都市)の一角、京都府木津川市だった。

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

【企画制作】新潮社